

[A] 不換紙幣と兌換紙幣

(1) 貨幣

唐突な質問だけど、「あなたの持っている(持っていない人はドンマイ)1万円札は、本当に1万円の価値があると思いますか？」

いきなりこんな質問をされると戸惑うかもしれないし、もしくは質問の意図もわからないといった可能性もあるかもしれない。君たちから言わせると「何を言っているんだ？1万円は1万円じゃねえか。1万円の価値があるに決まっているだろ」と答えると思う。

でも、その答えはYESでもあり、NOでもある。つまり、“1万円札は1万円の価値があるとも言えるし、1万円の価値はないとも言える”んだ。その理由は後述するけど、それを理解するためには“貨幣とはどういうものなのか”を理解しないと納得することはできない。なので、貨幣とはどういうものなのかについて説明していこう。

(2) 兌換紙幣

貨幣は人々が売買をするときに用いられる。その貨幣というものにおいて、最も重要になってくるのが“信用度”というものだ。少し抽象的すぎるので具体的に貨幣の歴史を簡単に説明していこう。

古代においても貨幣の代わりとして用いられていたものがある。それが米・布・絹だ。例えば、何かしら欲しい品物があった場合、その品物に見合った分の米などを代金の代わりとして支払うんだ。例えば米 100g で支払ったり、布・絹 1m で支払ったりして、その品物を購入するわけだ。こういった米や布・絹などの物品が貨幣としての機能を果たす場合、これを物品貨幣という。このように、古代においては米・布・絹などが貨幣の代わりとして用いられていたわけだけど、何故これらが貨幣の代わりの役割を果たすことができたのか？それは、こういった米や布・絹は誰もが必要とする物であり、それだけの価値があると考えられているので、これらは貨幣として用いられただけだ。つまり、米や布・絹にはそれだけの“信用度”があるから、貨幣として用いることが出来たわけだね。

ところが、経済が発達して流通取引が活発化してくると、たくさんの品物を売買するから、それだけ多くの貨幣が必要になってくる。そうすると品物をいっぱい購入したい場合には、たくさんの米・布・絹を持ち運ばなければならないので、流通取引が活発化してくると、物品貨幣では持ち運びが不便になってしまうわけだ。

そこで、米・布・絹などのかさばらないで、なおかつそれらに代わるだけの“信用度”がある物質が貨幣として用いられるようになる。それが金を用いた金貨や銀を用いた銀貨だ。でも、この金貨や銀貨の場合も問題を抱えることがある。先ほど言ったように、取引が活発化してくると、それに対応した分の金や銀を採掘しなければならない。ゆえに、金や銀がそれほど採掘できなければ、貨幣として機能するのは難しいわけだ。

でも、戦国時代になると甲斐国・伊豆国や佐渡国の相川金山や石見国の大森銀山・但馬国の生野銀山など金・銀の採掘量が大幅に増加するようになっていった。そして、江戸時代初期にはそれに対応できるだけの金や銀が採掘できたので、金貨や銀貨が発行されて取引で用いられるようになっていったんだ。でも、江戸中期以降になると、金や銀の産出量が頭打ちになってしまい、あまり金や銀が産出できなくなってしまった(なおかつ、この時期にはオランダや中国との長崎貿易によって、日本から金や銀が大量に流出してしまった)。だから、取引が活発になればなるほど、貨幣としての金や銀がたくさん必要になってくるのにそれがあまり採れない。

そこで、明治時代に政府が発航するようになったのが紙幣や銀行券などの通貨なんだ。しかし、この通貨には“信用度”。という1番の問題点がある。例えば、新しく紙幣が発行されて、そこには“1両”と書いてあったとする。でも、“1両”とは書いてあるけど、実際にはただの紙切れにしか過ぎない。つまり、今まで“1両”と書いてあった小判には、ちゃんと素材自体に1両分の金(約15gの金)が含まれているから、それだけの価値があると判断できる。しかし、新しく発行された紙幣には“1両”と書いてあるものの素材は所詮紙切れ。だから、どう考えても1両の価値があるとは思えない。つまり、紙幣だと“信用度”がないわけだ。

そこで、その紙幣に“信用度”を持たせるために、銀行に持っていけば、その紙幣と1両分の金貨や銀貨(金貨や銀貨をまとめて正貨という)と兌換(無条件での交換のこと)できると約束してあげるんだ。つまり、その1両紙幣は“1両分の金貨 or 銀貨との引換券”だと思ってくれればわかりやすいかな。このような金貨、又は銀貨と交換できる紙幣のことを兌換紙幣という。そして、その際にその紙幣が金貨と交換できる制度であれば金本位制といい、紙幣が銀貨と交換できる制度であれば銀本位制といい、これらをまとめて本位制度という。だから、先ほど正貨という言葉が出てきて、金貨 or 銀貨のことを言うのと記したけど、金本位制の場合の正貨とは金貨のことを指し、銀本位制の場合の正貨とは銀貨を指すことになるんだ。

(3) 本位制度(金本位制・銀本位制)

そして、紙幣と金貨を交換できる金本位制は欧米諸国で主流の制度で、紙幣と銀貨を交換できる銀本位制はアジア諸国で主流の制度だったんだけど、これら本位制度(金本位制・銀本位制)のもとでは以下のような原則がある。

―<本位制度(金本位制・銀本位制)の原則>―

- ①紙幣の発行量は、その国の正貨(金貨 or 銀貨)の保有量と同じ量しか発行してはならない
- ②外国との貿易取引の決済は正貨(金貨 or 銀貨)で行わなければならない

原則の①「紙幣の発行量は、その国の正貨(金貨 or 銀貨)の保有量と同じ量しか発行してはならない」については少し考えてみれば当たり前の話。兌換紙幣はその国が発行する紙幣を銀行などに持っていけば、正貨(金貨 or 銀貨)と無条件で交換できるわけだよね。ということは、自分の国が持っている正貨(金貨 or 銀貨)の保有量よりも多くの紙幣を発行してしまったら、紙幣と正貨(金貨 or 銀貨)が交換できるという条件が嘘になってしまう。だから、兌換紙幣を発行する場合は、自分の国の正貨(金貨 or 銀貨)保有量よりも多くの紙幣は発行してはならないんだ。

次に原則の②「外国との貿易取引の決済は正貨(金貨 or 銀貨)で行わなければならない」について。外国からしてみれば、日本でしか使われていない紙幣を取引の際に手渡されても困る(「円」が現在のように国際的に信用されている場合は別だけど)。だから、貿易で決済する際には紙幣ではなく国際的に信用度のある正貨(金貨 or 銀貨)で支払わなければいけないんだ。

―<日本の本位制度(金本位制・銀本位制)の変遷(詳細は授業で解説する)>―

江戸幕府に代わる形で、薩摩藩・長州藩を中心に天皇をトップとした新政府(明治政府)は1868年に成立した。もちろん新政府(明治政府)は上記のような世界的に主流な本位制度(金本位制・銀本位制)を採用したかったんだけど、紙幣と交換できる大量の正貨(金貨 or 銀貨)なんて持っているわけがない(よく噂になる徳川埋蔵金も見つからなかったしね…)。しかも、成立時期には旧江戸幕府軍との戊辰戦争で戦っている最中だったので、多額の戦費が必要だった。そこで、「もうしょうがないから、正貨(金貨 or 銀貨)と交換できない不換紙幣を刷っちゃえ!(不換紙幣については後述する)」と、1868年には太政官札という高額の不換紙幣、1869年には民部省札という少額の不換紙幣を発行して戦費を調達している。

そして、その後の1871年の新貨条例で欧米諸国にならって金本位制を採用すると発表するとしたんだけど、国内では太政官札や民部省札といった不換紙幣が流通している状態なので①の条件はクリアできておらず、外国との貿易だけは金貨で行う②の条件をクリアしているだけだった。そのため、1871年の新貨条例による金本位制の採用は、外国貿易での体裁を整えただけの「建前上」の金本位制」といわれる。

その後、1881年に大蔵卿に就任した松方正義による松方財政のもと不換紙幣の回収や正貨の蓄積といった問題を解決して、1886年に銀兌換条例(1886)を制定し、この①・②の条件を完全にクリアした銀本位制が確立されたんだ。なお、この当時の日本はまだアジア諸国との貿易が中心の小国にすぎず、新貨条例で採用した建前上の金本位制は完全に背伸びをしてしまったものだった。なので、アジア諸国で主流の銀本位制にしておいたんだけど、日清戦争(1894～1895)で勝利すると日本もようやく列強諸国の仲間入りを果たすことになる。そして、日清戦争での賠償金を元手に、1897年に貨幣法という法律を制定し、アメリカの金 1.5g を含む 1ドル金貨 に対応して金 0.75g を含む 1円金貨 を鑄造して、①・②の条件を完全にクリアした金本位制に移行することになるんだ(詳細は授業内で説明する)。

ちなみに大正時代になると、1914年に勃発した第一次世界大戦の影響で欧米諸国が金本位制を停止したため、日本も1917年に金本位制を停止する。しかし、戦後恐慌(1920)・震災恐慌(1923)・金融恐慌(1927)といった連続恐慌のせいで日本の金本位制への復帰は遅れ、ようやく1930年に金本位制に復帰したものの、わずか1年後の1931年に金本位制を再び停止し、現在に至るまで日本では金本位制は停止されたままになっている。

何かめんどくせえシステムだなあって思った諸君。でも、この金本位制・銀本位制を確立するとメリットが当然ついてくる。まずは、国内で発行される紙幣流通量が自国の正貨(金貨 or 銀貨)保有量と同じであるため、紙幣流通量が安定する。そして、紙幣を銀行に持っていけば正貨(金貨 or 銀貨)と交換してくれるので、日本で銀本位制が確立された1886年以降だと「1円札」と書かれている紙幣を銀行に持っていけば、「約27gの1円銀貨」と交換してくれるし、金本位制に移行した1897年以降だと「1円札」を銀行に持っていけば「約0.75gの1円金貨」と交換してくれるので、これほど安心できる紙幣はないよね。ゆえに、紙幣価値は安定することになり、自国の正貨保有量と同じ分の紙幣が発行されるので紙幣流通量が安定して、物価も安定することになる。また、他にも正貨(金貨 or 銀貨)と交換できる「円」に対する国際的な信用度が増すというメリットもあるね。まあ、デメリットとしては、国家財政がピンチに陥った時に、大量に紙幣を発行したりすることができなくなっちゃうことぐらいかな。

(4) 不換紙幣

ここまでは兌換紙幣の話をしたけど、兌換紙幣を発行するには条件がある。それは、その国が発行する紙幣と兌換できるだけの正貨(金貨 or 銀貨)を保有していなければならないということ。まあ、[(3)兌換紙幣]における条件①「紙幣の発行量は、その国の正貨(金貨 or 銀貨)の保有量と同じ量しか発行してはならない」を考えてみれば当然のことだよね。だから、自国の正貨(金貨 or 銀貨)保有量が少ない場合や、あるいは貿易の輸入超過が続いて自国の正貨(金貨 or 銀貨)保有量が減少してしまった場合には(先ほど説明したように、外国との貿易決済は正貨が用いられるので、輸入超過が続くと正貨での支払いが続いて自国の正貨保有量が減少してしまう)、自国の発行する紙幣と正貨の兌換ができなくなってしまう。

そのような場合は、しょうがないけど正貨(金貨 or 銀貨)と交換できない紙幣を発行するしかない。このような正貨(金貨 or 銀貨)と交換できない紙幣のことを不換紙幣という。ただ、この不換紙幣には一つの問題点が出てくる。今までの古代における米・布・絹などの物品貨幣、江戸時代における金貨・銀貨といった貨幣、そして近現代における兌換紙幣の時にも重要になってくるのは“信用度”であると再三再四述べてきた。でも、不換紙幣の場合は正貨(金貨 or 銀貨)と交換できないわけだから、いったい何が“信用度”の基準になってくるのだろうか？

不換紙幣の場合は、その“信用度”は全てその国の政府(または不換紙幣を発行する銀行)の政策にかかってくるんだ。…と、言ってもイマイチよくわからないだろうから、具体的に説明していこう。兌換紙幣の場合、発行する紙幣流通量は自国の正貨(金貨 or 銀貨)保有量と同じでなければならないという制限があるけど、不換紙幣の場合ははじめに“紙幣と正貨(金貨 or 銀貨)は交換できない”と宣言しているわけだから、自国の正貨(金貨 or 銀貨)保有量にかかわらず紙幣を自由に発行できるよね。だから、極論になっちゃうけど大量に不換紙幣を発行しようが、ほとんど不換紙幣を発行しなかりょうが問題はないわけだ。

そこで、政府や通貨当局(日本の場合は日本銀行)が不換紙幣の流通量をコントロールするんだ(これまでの本位制度(金本位制・銀本位制)に対して、1930年代以降のこの制度を管理通貨制度という)。つまり、国内で流通している紙幣量を判断・把握して、通貨当局(日本の場合は日本銀行)がバランスよく紙幣流通量を調整していくわけだ。

だから、ちゃんと経済の実態に見合った分だけの紙幣流通量が出回っているのであれば、不換紙幣であってもちゃんと“信用度”は保たれるわけだ。でも、もしも戦争が起きたり、災害が起きたりしてお金が大量に必要になってしまったらどうなるだろう？その場合は、政府が不換紙幣を大量に発行して、公共事業などにお金を費やすなど積極財政というガンガンお金を流通される政策をとってみればいい。では、このように不換紙幣が大量に出回って国内の紙幣流通量が増大した場合には、どういう現象が起きるのかを考えてみよう。

<紙幣流通量が増大する場合>

大前提として明治政府は1873年に制定した地租改正条例によって、土地所有者に地価(土地の価値)の3%(1877年以降は2.5%)を地租として金納させている。例えば地価(土地の価値)が100万円だとすると、政府に3万円という一定額の地租を金納することになる(1877年以降は2.5%なので地租は2.5万円になるけど、計算が面倒になるのでここでは3万円の金納で固定して説明していく)。これを定額金納の地租というんだけど、この知識を基本手において以下のパターン①～パターン③までを考えていってほしい。

まず、パターン①。国内の紙幣流通量が増大した場合は、大量に出回った紙幣には希少価値がなくなり、紙幣の価値が下がる。そして、紙幣価値が下落すると、政府に納められる3万円は実質的には3万円以下の価値に下がっているのだから、政府の歳入は実質的に減少することになってしまうわけだ。

続いて、パターン②。国内の紙幣流通量が増大した場合は、国内に紙幣が出回っているわけだから、皆がお金を持っているという状態になる。まあ、単純に考えて皆がお金持っていてウハウハなら、物価だって上がるわな。このような品物の物価が上がるのが物価高であり、このような物価高の経済状況をインフレーション(インフレ)いう。

ということは、インフレの時には物価高＝米価高となるので、農民が生産した米は高値で売って農民の収入は増加することになる。そして、その収入が増加している状況で、地租は一定額の3万円を金納すればいいのだから、インフレ(物価高＝米価高)時には、農民にとって地租の負担は実質的に軽減されることになるよね。

最後に、パターン③。インフレというのは、皆がお金を持っている状態になるので一般的に景気が良いと捉えられるけど、貿易における輸出入にも影響が出てくる。だって、インフレによって物価が高くなっているということは、外国人からしてみれば「Wow!!日本の商品はずいぶん値段が高いデース!!これでは買いたくないデース」と日本からの輸出は伸び悩み、逆に物価の安い海外からの輸入が増大することになる。そして、ここに重大な問題が出てくるんだ。さて、海外と貿易で決済する際には何が使われたっけ？そう、正貨(金貨 or 銀貨)だ。なので、海外から輸入が増えれば増えるほど、日本は正貨(金貨 or 銀貨)で支払いをすることになるので、日本の正貨保有量は減少することになってしまうわけだ。

—<紙幣流通量が増大した場合>—

①紙幣流通量が増大→紙幣の価値が下落

→定額金納の地租により、政府の歳入は実質的に減少することになる

②紙幣流通量が増大→物価が上昇(物価高)=インフレーション(インフレ)

(1) 物価高=米価高で農民の収入が増加→定額金納の地租により農民の地租の負担が実質的に軽減する

(2) 物価高のため輸出減少・輸入増大→輸入が増大すると自国の正貨保有量が減少

紙幣流通量が増大すると、紙幣価値が下落したことで政府の歳入は実質的に減少してしまう。さらに物価高=米価高により農民の地租の負担は実質的に軽減されることになるが、一方で物価の高い日本からの輸出は減少して、日本の正貨保有量も減少してしまう。じゃあ、これを改善したい場合にはどうすればいいか？酒税や煙草税などの増税をして出回ってしまった紙幣を国民から回収し、さらに政府の歳入を減らす緊縮財政という政府がお金を節約する財政政策をとれば、国内にお金が出回らなくなって紙幣流通量を減少させることができる。

<紙幣流通量が減少する場合>

まず、パターン①。国内の紙幣流通量が減少した場合は、ほとんど出回っていない紙幣には希少価値が生まれて、紙幣の価値が上がる。そして、紙幣価値が上昇すれば、地租改正によって政府に納められる3万円は実質的には3万円以上の価値に上がっているので、政府の歳入は実質的に増加することとなるわけだ。

続いて、パターン②。国内の紙幣流通量が減少した場合は、国内に紙幣がほとんど出回っていないわけだから、皆がお金を持っていない状態になる。すると、人々は物を買う余裕がなくなるので、企業やお店は商品の値段を下げないと人々が物を買ってくれないので、物価が下がる物価安となる。このような物価安の経済状況をデフレーション(デフレ)いう。

ということは、デフレの時には物価安=米価安となるので、農民が生産した米は安値しか売れないので農民の収入は減少することになる。でも、その収入が減少している中で、地租は一定額の3万円を金納しなければならないので、デフレ(物価安=米価安)時には、農民にとって地租の負担は実質的に増大することになるんだ。

最後にパターン③。デフレというのは、みんながお金を持っていない状態になるので一般的に景気が悪いと捉えられるけど、貿易における輸出入には良い影響が出てくる。だって、デフレによって物価が安くなっているということは、外国人からしてみれば「Wow!!日本の商品はずいぶん値段が安いデヘス!!これなら買いたいデヘス」と日本からの輸出は促進され、逆に物価の高い海外からの輸入は減少することになる。そして、海外との貿易決済は正貨(金貨 or 銀貨)で行われるので、日本からの輸出が増えれば増えるほど、外国が正貨(金貨 or 銀貨)で支払いをしてくれるから、日本の正貨保有量を増加させることができるわけだ。

—<紙幣流通量が減少した場合>—

①紙幣流通量が減少→紙幣の価値が上昇

→定額金納の地租により、政府の歳入は実質的に増加することになる

②紙幣流通量が減少→物価が下落(物価安)=デフレーション(デフレ)

(1) 物価安=米価安で農民の収入が減少→定額金納の地租により農民の地租の負担が実質的に増大する

(2) 物価安のため輸出増大・輸入減少→輸出が増大すると自国の正貨保有量が増加

このように、不換紙幣が発行されている場合は、政府の政策によって紙幣の価値が上がったり下がったり、また物価が上がったり下がったりして、輸出入の増大・減少にも影響が出てくる。それらは、政府が発行する不換紙幣の流通量に要因があるわけで、その紙幣流通量を政府がコントロールすることが重要になる。だから、不換紙幣を発行する際の「信用度」は、その政府が発行する紙幣流通量にかかってくるわけだね(その信用度が崩壊した例として有名な国がアフリカのジンバブエ共和国で、ジンバブエでは中央銀行が政府に言われるがままに紙幣を増刷しまくった結果ハイパーインフレが起きて、2008年には1億ジンバブエドルが1円と同じ価値になり、300兆ジンバブエドル=1円にまで至った2015年に廃止されている)。

では、最初の質問にあった内容に話を戻そう。現在の日本で発行されている紙幣は不換紙幣だ。だから、紙幣流通量が政府によって程よく調整されている状況であれば、1万円札にはちゃんと1万円の価値がある。でも、紙幣を増発して紙幣流通が多くなると、紙幣価値が下がってしまうこともある(ジンバブエは極論レベルだけど笑)。ゆえに、最初の1万円札に1万円の価値があるかという答えはYesでもあるけど、Noにもなりえるわけだ。

[B] 為替相場

(1) 為替相場

日々過ごす中の新聞やニュースなどで、「今日は1ドル＝100円の円安・ドル高でした or 円高・ドル安でした。」などの言葉を耳にと思う。日本史においても近現代になると、この言葉が否応なしに出てくるので、為替相場についても正確に理解しておいてほしい。

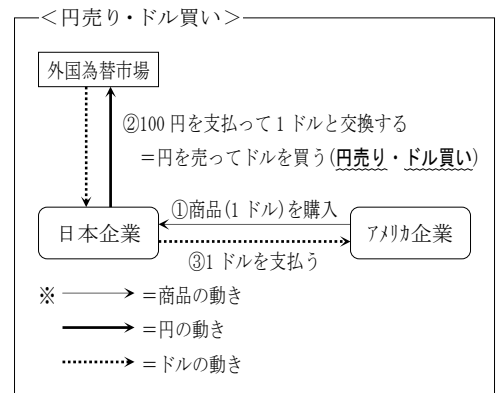
現在では **1973 年以降「変動為替相場制(変動相場制)」** がとられており、その相場は毎日少なからず値動きが起きている。では、なぜ為替相場が変動するのだろうか。

(2) 円売り・ドル買い

例えば、右図のように日本企業がアメリカ企業から1ドルの商品を購入する取引が行われたとしよう(①←)。でも、日本企業は「円」を使用しているから、アメリカ企業に1ドルを支払うためには、「円」と「ドル」を交換しなければならないので、銀行などの **外国為替市場** で「円」・「ドル」の交換を行う必要が出てくる。

その銀行で交換する際に、「現在は1ドル＝100円ですので、100円をお支払いいただければ、1ドルをお渡しします。」と言われる。ここで、100円を支払って1ドルと交換することを、100円を売って1ドルを買うことから「**円売り・ドル買い**」という(②→)。

あとは、円売り・ドル買いでドルをゲットしたら、アメリカ企業に1ドルを支払えばいいわけだ(③→)。なお、この円売り・ドル買いという行為は、今回のような輸出入関係だけでなく、FX などでの取引や、君たちが海外旅行に行く際などにも行われている。



(3) 円安・ドル高

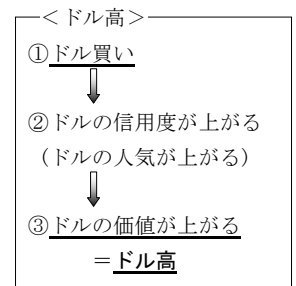
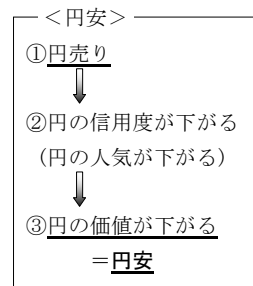
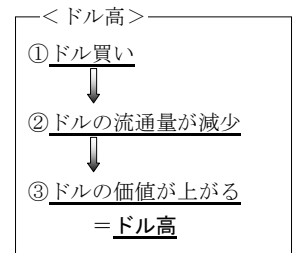
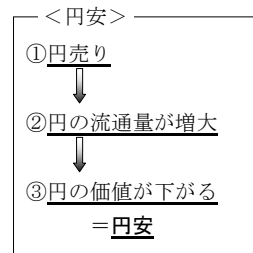
この際に、取引を行った相場が1ドル＝100円であった場合、**為替相場は1ドル＝100円**ということになるんだけど、この為替相場は現在のところ毎日変動しているよね。では、なぜこの為替相場は日々変動するのだろうか？

それは、円売り・ドル買いなどが行われているからだ。例えば、先ほどの輸出入関係で日本企業が輸入することが増えた場合や、FX などでの取引で差額利益を見越して円売り・ドル買いが行われた場合、また日本人が海外旅行に行く際にも円売り・ドル買いが行われるよね。

その**円売り**が進行して市場に円が売られると、市場における**円の流通量は増大する**。そのため、円の希少価値は下がって**円の価値は下落する**ことになる(これを**円安**という)。

その一方で、**ドル買い**が進行して市場からドルが買われると、市場における**ドルの流通量は減少する**。そのため、ドルの希少価値が高まって**ドルの価値は上昇する**ことになる(これを**ドル高**という)。

なお、ここでは「市場における円・ドルの流通量」から円・ドルの価値が変わると説明したけど、「円・ドルの信用度」や「円・ドルの人気」で考えても同じ答えになる。例えば、**円売り**により「円が売られる」ということは、「円は信用されていない」・「円は人気がない」ことになるので(信用されていないから円が売られるわけだし、人気がないから円を売るわけだね)、**円の価値が下がり円安**になる。また、**ドル買い**により「ドルが買われる」ということは、「ドルは信用されている」・「ドルは人気がある」ことになるので(信用されているからドルを買われるし、人気があるドルを買うわけだね)、**ドルの価値が上がりドル高**になる。まあ、「市場における流通量」・「信用度」・「人気」のどれで考えても、結局は同じ答えになるので自分がピンときやすいもので考えてくれればいい。



そして、円安・ドル高となると、1ドル=100円だった為替相場は、1ドル=200円などに変動したりするんだ。小学生レベルだと「100円から200円に上がったのだから、円高じゃないの？」という質問もあるが、この際に理解するポイントになるのは、“数字”ではなく“価値”である。

「1ドル=100円」の時は、日本側が1ドルの商品を購入する際に100円で買っていたのに、「1ドル=200円」になると1ドルの商品を購入する際には200円も必要になるよね(200円出しても1ドルとしか交換できないのだから円の価値は下がっているよね)。つまり、円の価値は下がっているわけだから円安ということになる。

同じように、「1ドル=100円」の時に、アメリカ側が100円の商品を購入する際に1ドルで買っていたものが、「1ドル=200円(0.5ドル=100円)」になると100円の商品を購入する際にはわずか0.5ドルで買えることになる(1ドル出せば200円と交換できるのだからドルの価値は上がっているよね)。つまり、ドルの価値は上がっているわけだからドル高ということになるわけだ。

上記のことを踏まえると、「1ドル=100円」から「1ドル=200円」の円安・ドル高になるとそれぞれの輸出・輸入にも大きな影響が出る。まずは日本から輸出する場合、言い換えるとアメリカ人が日本の商品を購入する場合、100円の日本商品を購入する際に今までの「1ドル=100円」の時は1ドルを支払っていたのが、「1ドル=200円」になるとわずか0.5ドルで購入できるようになるわけだ(1ドル=200円は0.5ドル=100円だから)。

そうすると、アメリカ人は「Wow!!日本の商品は安いデ〜ス!!いっぱい買いたいデ〜ス!!」と日本の輸出は有利になって伸びやすくなるわけだ。つまり、「円安」の時は「円(の商品が割)安」になるから、日本から海外へ輸出することが有利になる。また、その一方で「円安」ということは「円(の商品が割)安」状態になるから、「日本で売られている商品は安いデ〜ス」と日本に旅行する外国人も増えることになる。

一方で、「1ドル=100円」から「1ドル=200円」の円安・ドル高になると、日本が輸入する場合、言い換えると日本人がアメリカの商品を購入する場合、1ドルのアメリカ商品を購入する際に今までの「1ドル=100円」の時は100円を支払っていたのが、「1ドル=200円」になると200円も支払わなければいけなくなる(1ドル=200円だから)。ということは、日本人は「何やねん!!アメリカの商品クソ高いじゃねえか!!こん高い値段で買ってもらえるかってやんでえ!!」と日本の輸入は不利になって伸びにくくなるわけだ。つまり、「ドル高」の時は「ドル(の商品が割)高」になるから、日本がアメリカから輸入することは不利になる。また、その一方で「ドル高」ということは「ドル(の価値が)高い」状態になるから、「ドル高のおかげで日本も含めて他国の商品めっちゃ安く買えるデ〜ス!!」とアメリカから海外に旅行する人が増えることにもなる。

まあ、まとめると「円安」の時は「円(の商品が割)安」になり、日本の商品が割安になるので日本の輸出は有利になる。一方で「ドル高」の時は「ドル(の商品が割)高」になり、アメリカの商品が割高になるので日本の輸入は不利になる。なので、いちいち考えるのが面倒くさい場合は、「円安」・「円高」・「ドル安」・「ドル高」だろうが、その途中に「～の商品が割～」を付け加えて、「円 or ドル “の商品が割” 安 or 高」になると考えると楽になるだろう。

＜円安・ドル高が輸出入に与える影響＞

- ① 円安(円の価値が安い)→円(日本)の商品が割安になる→日本の輸出は有利になる
- ② ドル高(ドルの価値が高い)→ドル(アメリカ)の商品が割高になる→日本の輸入は不利になる

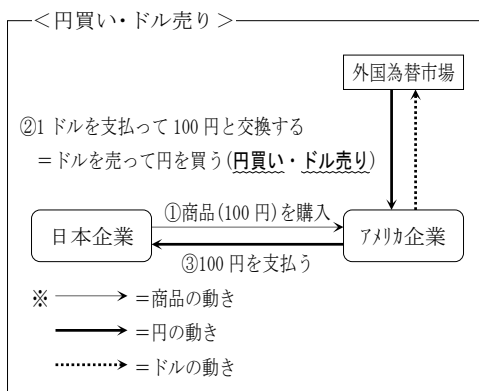
(4) 円買い・ドル売り

次に、逆パターンを見ていこう(先ほどの[(2)円売り・ドル買い]をコピーして逆パターンにただけだけど)。

例えば、右図のようにアメリカ企業が日本企業から100円の商品を購入する取引が行われたとしよう(①――→)。でも、アメリカ企業は「ドル」を使用しているから、日本企業に100円を支払うためには、「ドル」と「円」を交換しなければならないので、銀行などの外国為替市場で「ドル」・「円」の交換を行う必要が出てくる。

その銀行で交換する際に、「現在は1ドル=100円ですので、1ドルをお支払いいただければ、100円をお渡しします。」と言われる。ここで、1ドルを支払って100円と交換することを、1ドルを売って100円を買うことから「円買い・ドル売り」という(②.....→)。

あとは、円買い・ドル売りで円をゲットしたら、日本企業に100円を支払えばいいわけだ(③←――)。なお、この円買い・ドル売りという行為は、今回のような輸出入関係だけでなく、FXなどでの取引や、君たちが海外旅行に行く際などにも行われている。



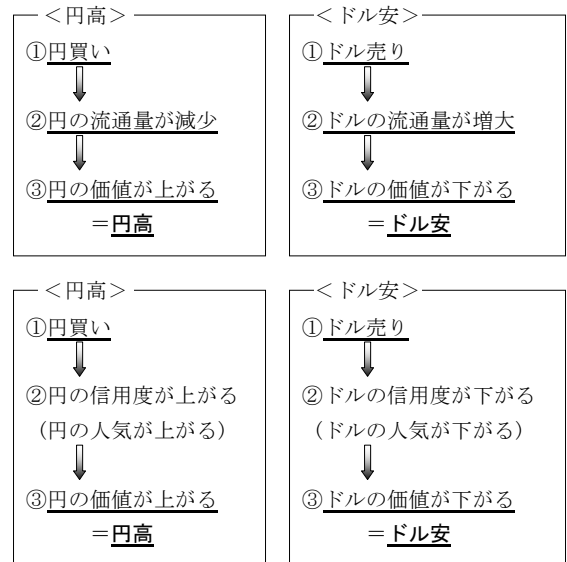
(5) 円高・ドル安

既述したように、先ほどの輸出入関係で日本企業が輸出(アメリカ企業が輸入)することが増えた場合や、FX などでの取引で差額利益を見越して円買い・ドル売りが行われた場合、またアメリカ人が海外旅行に行く際にも円買い・ドル売りが行われるよね。

その円買いが進行して市場から円が買われると、市場における円の流通量は減少する。そのため、円の希少価値が高まって円の価値は上昇することになる(これを円高という)。

その一方で、ドル売りが進行して市場にドルが売られると、市場におけるドルの流通量は増大する。そのため、ドルの希少価値は下がってドルの価値は下落することになる(これをドル安という)。

なお、ここでは「市場における円・ドルの流通量」から円・ドルの価値が変わると説明したけど、先ほどと同じように「円・ドルの信用度」や「円・ドルの人気」で考えても同じ答えになる。例えば、円買いにより「円が買われる」ということは、「円は信用されている」・「円は人気がある」ことになるので(信用されているから円が買われるし、人気があるから円を買うわけだね)、円の価値は上がり円高になる。また、ドル売りにより「ドルが売られる」ということは、「ドルは信用されていない」・「ドルは人気がない」ことになるので(信用されていないからドルが売られるわけだし、人気がないからドルを売るわけだね)、ドルの価値は下がりドル安になる。



そして、円高・ドル安となると、1ドル=100円だった為替相場は、1ドル=50円などに変動したりするんだ。小学生レベルだと「100円から50円に上がったのだから、円安じゃないの?」という質問もあるが、やっぱり理解するポイントとなるのは、“数字”ではなく“価値”である。

「1ドル=100円」の時は、日本側が1ドルの商品を購入する際に100円で買えていたものが、「1ドル=50円(2ドル=100円)」になると1ドルの商品を購入する際にはわずか50円で買えることになる(50円出せば1ドルと交換できるのだから円の価値は上がっているよね)。つまり、円の価値は上がっているわけだから円高ということになる。

同じように、「1ドル=100円」の時に、アメリカ側が100円の商品を購入する際に1ドルで買っていたものが、「1ドル=50円(2ドル=100円)」になると100円の商品を購入する際には、2ドルも払って買わなければいけないことになる(1ドル出しても50円としか交換できないのだからドルの価値は下がっているよね)。つまり、ドルの価値は下がっているわけだからドル安ということになるわけだ。

上記のことを踏まえると、「1ドル=100円」から「1ドル=50円」の円高・ドル安になるとそれぞれの輸出・輸入にも大きな影響が出る。まずは日本から輸出する場合(アメリカが日本の商品を購入する場合)、100円の日本商品を購入する際に今までの「1ドル=100円」の時は1ドルを支払っていたのが、「1ドル=50円(2ドル=100円)」になると2ドルも支払わなければいけなくなる(1ドル=50円は2ドル=100円だから)。そうすると、日本アメリカ人は「Wow!!日本の商品は高いデヘス!!こんな値段では買ってられないデヘス!!」と日本の輸出は不利になって伸びにくくなるわけだ。つまり、「円高」の時は「円(の商品が割)高」になるから、日本から海外へ輸出することは不利になる。また、その一方で「円高」ということは「円(の価値が)高い」状態になるから、「円高のおかげで外国商品めっちゃ安く買えるやん!!」と日本から海外に旅行する人が増えることになる。

一方で、「1ドル=100円」から「1ドル=50円」の円高・ドル安になると、日本が輸入する場合(日本がアメリカの商品を購入する場合)、1ドルのアメリカ商品を購入する際に今までの「1ドル=100円」の時は100円を支払っていたのが、「1ドル=50円」になるとわずか50円で購入できるようになるわけだ(1ドル=50円だから)。ということは、日本人は「よっしゃ!!アメリカの商品クソ安いやんけ!!いっぱい買ったわ!!」と日本の輸入は有利になって伸びやすくなるわけだ。つまり、「ドル安」の時は「ドル(の商品が割)安」になるから、日本がアメリカから輸入することは有利になる。また、その一方で「ドル安」ということは「ドル(の商品が割)安」の状態になるから、「ドル安のおかげでアメリカの商品めっちゃ安いやん!!買まくったろう!!」と海外からアメリカに旅行する人が増加することにもなる。

まあ、これもまとめると「円高」の時は「円(の商品が割)高」になり、日本の商品が割高になるので日本の輸出は不利になる。一方で「ドル安」の時は「ドル(の商品が割)安」になり、アメリカの商品が割安になるので日本の輸入は有利になる。なので、いちいち考えるのが面倒くさい場合は、やっぱり「円安」・「円高」・「ドル安」・「ドル高」だろうが、その途中に「～の商品が割～」を付け加えて、「円 or ドル “の商品が割” 安 or 高」になると考えると楽になるだろう。

— <円高・ドル安が輸出入に与える影響> —

- ① 円高(円の価値が高い) → 円(日本)の商品が割高になる → 日本の輸出は不利になる
- ② ドル安(ドルの価値が安い) → ドル(アメリカ)の商品が割安になる → 日本の輸入は有利になる

(6) 為替相場が変動する理由

ここまでは民間で行われる輸出入関係・FX・海外旅行などの視点で説明したけど、国家(政府)レベルの政策によっても為替相場は変動することがある。[(A) 兌換紙幣・不換紙幣] で不換紙幣について説明したけど、その国が不換紙幣を発行している場合にも為替相場に影響を与えることがある。

今現在世界で最も取引に利用される基準となる通貨を基軸通貨(国際通貨とも呼ばれる)というんだけど、それに採用されているアメリカのドル・日本の円・EU(欧州連合)のユーロ・イギリスのポンド・中国の人民元は全て不換紙幣である。だから、例えば日本が「最近景気が良くないから、たくさんお金を刷って円を発行しよう!」とすると、市場の円の流通量が増大することになるから、もちろん円の価値は下がって円安となり、相対的にドル高となる(例えば、第2次安倍晋三内閣で2013年から行われたアベノミクスでは、日本銀行による量的緩和政策が行われたため市場に大量の円が出回って円の価値が下がり、2012年の1ドル=70円台から2015年には1ドル=125円台までの円安・ドル高が進行した)。一方で、今度はアメリカが「アメリカも最近景気が良くないから、たくさんお金を刷ってドルを発行しよう!」とすると、今度は市場のドルの流通量が増大することになるので、ドルの価値は下がってドル安となり、相対的に円高になるわけだ。このように政府の政策によっても、為替相場が変動することがあることも留意しておいてほしい(まあ、某国では政府が為替相場に介入して、相場が1ドル=7元未満になるように調整する為替操作を行っているため相場がほとんど変わらないんだけどね…)。

このように、民間で行われる輸出入関係・FX・海外旅行や、国家(政府)レベルで行われる紙幣流通策によって、為替相場が変動する理由がわかったと思う。しかし、明治時代～昭和時代(戦前)の頃には為替相場が変動しない時期もあったし、戦後もブレトン＝ウッズ体制(IMF体制)と呼ばれて 1971年までは 1ドル=360円、1971～1973年までは 1ドル=308円で為替相場が固定される固定為替相場制(固定相場制)がとられていた時期もあったんだ。その仕組みについては、授業にて説明しよう…to be continued.